



UEDA

Women's Junior College

上田女子短期大学附属図書館報

みすず

No.43
2016.12

Ueda Women's Junior College Library News Misuzu

図書館はもう一つの大学、人と人、地域と地域、世界をつなぐ空間

総合文化学科 教授(副館長) 上原 貴夫

図書館については近頃思うことがある。私は住んでいる町の教育委員長を務めさせていただいてきた。その時からずっと考え続けている。

町には図書館がある。私が委員の任期中に新しく建てたものである。気に入っている図書館である。機会があったらぜひ訪れてほしい。

この図書館について1つの思いを持ってその充実に取り組んできた。

それほど大きな図書館ではない。町の文化施設としてホールなどの機能も取り込んで建てたものであるため、入り口までやや長いエントランスがある。そこを抜けると開架式の図書室が目に入る。左手には幼児のための絵本コーナーがあり、ここには小さな読み聞かせ用の空間がある。私もこの場所で小さな子ども達に読み聞かせをすることを楽しみにしている。お母さん、お父さんもわが子と一緒に聞いてくれる。また、かなりの頻度でお父さんが子ども達に本を読んであげている姿を見かける。なかには、英語の絵本を読んであげているお母さんもいる。とてもほほえましい姿が見かけられる。こんな小さな子も含めいろいろな人が活用するのが図書館であると気づく。

周囲の壁や机の上も含め、空いた空間には切り絵やモザイクの飾り絵が展示されている。これは季節ごとや図書館の催しごとに取り替えられる。季節や出来事をとらえた数々の絵や切り絵はとても見事であり、見る人の心を和ませる。

カウンターや館内のあちこちにはいろいろな年齢の人が貸し出しや整理の業務に携わっている。その姿はとても楽しそうであり、本と人とのふれあいの心地よさをただよわせている。モザイクの飾り絵の製作や本の整理の人のほとんどはボランティアの方々である。

また、図書館は機能として全国の図書館、世界の各地に繋がっている。調べ物などの時、その機能の多様さ、スピードに驚き、有りがたく活用させてもらっている。同じように仕事や趣味も含め調べるために図書館を使っている人も多い。

図書館は人をつなぎ、知識をつなぎ、新たな世界を目の当たりに展開させてくれる。

私は図書館に人と人、地域と地域、世界をつなぐもう一つの大学を見ている。

目次

図書館はもう一つの大学、人と人、 地域と地域、世界をつなぐ空間
本の魅力
島中 恵「ちんぷんかんぷん」
本の大切さ
図書館の思い出
図書館
財産となった貴重な時間
上田女子短期大学教員が学生にすすめる本
図書館ガイド 第18回図書館総合展
図書館ガイド 公開講座 「上田女子短期大学図書館講座」
本学教員の最新刊著作

CONTENTS

総合文化学科 教授(副館長)	上原 貴夫	1
幼児教育学科 専任講師	堤 裕美	2
幼児教育学科 専任講師	吉田 美奈	3
幼児教育学科 1年	金田 優妃	4
幼児教育学科 2年	大島 梨菜	4
総合文化学科 1年	門倉 早希	5
総合文化学科 2年	藤原 弘奈	5
総合文化学科 准教授	佐藤 厚	6
幼児教育学科 専任講師	山本 一生	6
		7
		8
		8

本の魅力

幼児教育学科 専任講師 堤 裕美

私は、小さい頃からそれ程読書量がある方ではなく、どちらかというと外で遊んでいる時間の方が長かったと思う。それでも、今2歳になる娘に絵本の読み聞かせをするのが毎晩の日課となり、自分が小さかった頃のことをたまに思い出すと、私も母に本を読んでもらうことが好きだったことや、あんな本も読んでもらったな、こんな本も読んだなと次から次へと物語の場面が挿絵とともに思い出される。特に小学校入学前後の時期によく読んでいた童話集は、今でも割りと鮮明に記憶に残っている。日本昔話の怖い挿絵から恐怖心や「悪いことをするとバチが当たる」というような畏敬の念が幼心に刻み込まれていたような気もするし、嘘をつくとどうなるか、意地悪するとどうなるか・・・童話や絵本から感じたことは子ども時代の育ちに想像以上に影響があったのではないかと今になって感じる。それもきっと教えられたり、理屈で理解したりするのではなく、子どもの純粋な心で感じる事が最も大切なのだと思う。そう思うと、全ての子どもが時期を逃さず、絵本や童話からたくさんを感じて大きくなって行って欲しいと思う。

とは言っても、私は、中学、高校、大学と本からずいぶん離れてしまっていた。図書館に足を運ぶようになったのは、大学の卒業研究がきっかけだった。当時私は「高齢者の体力維持」に関心があり、体力の定義や、測定方法、高齢者の体力値など知らないことを調べていく過程と実際に測定し結果を検証していく過程がとても楽しく感じ、スポンジが水を吸うように図書館で資料を集めた。学生時代は図書館の利用というと、先行研究や専門書を探して読むことがほとんどだったが、保育士養成校で教鞭をとるようになってからは、自分の世界の狭さを思い知り、自分に経験のないことや、歴史的な変遷など知らない世界について情報を収集している。古い本でも新しい本でも新鮮な学びがある。

これまでの人生において、人との出会いによって影響を受けることは沢山あったが、本はあったこともない人の経験や思想から学ぶことができ、何度も読み返すこともできるし、場合によっては、前に読んだときと違う解釈もでき、誰かに何かを指摘されたり、教えられたりすることの少なくなった今では、本から影響

を受けることがとても多い。

話はもどり、娘は最近、『ひとりであんちできるかな』を毎晩読んで欲しがる。便秘気味でいつも泣きながらウンチをしており、絵本のようにトイレで元気なウンチが出せるようには、なかなかなっていないのだが、トイレへの関心や、排泄への意識に少しでも繋がっていくと良いなと願いながら読んでいる。また、『てんてんてん』は、0歳の頃にもブームがあったのだが、今年の秋までに登場する全ての虫(と言っても、てんとう虫、かたつむり、ちょうちょう、ほたる、かまきりの5種類なのだが)を実際に目にしたからか、今2度目のブームが来ている。「んぐまーま」のような、舌をかみそうな文字の羅列も、私と一緒に声に出して読んでいた時期もあり、こうやって音を覚えていくのかなと感じたこともあった。

『えんやらりんごの木』や『はらぺこあおむし』等、保育園でも良く読んでもらっていたリズムの良い本は、今では一人でも声に出して読んでいる。どんな本を読みたがるのか、その本に対してどんな反応をするのかということから子どもの成長を垣間見ることができ、何気ない毎日の読み聞かせの時間ではあるが、そんな子どもの変化も感じながら、これからも親子で本に親しんでいきたい。



畠中 恵 『ちんぷんかんぷん』

幼児教育学科 専任講師 吉田 美奈

「予防接種は済ませているから、その代金込みで1万円。普通じゃありえないよ。」と、半ば押し付けられるように買ってきた子犬。小さくてしっとり光る小豆粒のようだったことから、「あんこ」と名付けた。一日三回離乳食を与え、動物病院での健康診断を終えてお散歩が習慣になったころ、アルバイトで私が家を空けがちになったことによるストレスで「あんこ」は体調を崩し、実家に引き取られた。手元には新しいカメラと「あんこ」のフォトブックだけが残った。ここで私が取り上げる本は、読むたびに「あんこ」を思い浮かべずにはられない一冊である。

この本に収められている短編「はるがいくよ」では、桜が咲き始めた頃、主人公の若だんなの住む離れに突然赤ん坊が出現する。その赤ん坊は桜の花びらの妖だった。若だんなによって小べにと名づけられた妖はみるみるうちに成長し、かわいらしい娘へと姿を変える。共に過ごす時をいとおしみ、それがずっと続くことを願う若だんなと小べにだが、別れの時が刻々と近づくことに気づいてもいた。小べにの命を永らえさせるため、祖母の住む「神の庭」へと行ってほしいと願う若だんなだが、小べにはその気がないと答える。自分は桜の花びらなのだから、ずっとこのままでいるわけにはいかないのだと。そして小べには桜の盛りが過ぎるころ、ひとひらの花びらに戻るのであった。その時、若だんなはいつも過保護な兄やたちの思いを悟る。病弱でたびたび死にかけける自分に、一度兄やたちが尋ねたことがあった。「神の庭」に行くつもりはないかと。しかし、自分もまたこの世にとどまることを選んだのである。

「あんこ」と出会ったときは手のひらに収まるほどだったが、それでも他のきょうだいより一回り体が大きく、くせ毛で一本のつま先だけに白い毛が混じっていた。しかも臍ヘルニア持ちで不整脈もあった。育ててもコンテストには出せないという理由で引き取り手が見つからず、もてあまされていた。もしかしたら短命かもしれないと告げられていたが、命がある間、精一杯かわいがろうと覚悟を決めて引き取ってきたのである。できるだけ「あんこ」のそばにいてやりたかったが、アルバイトをやめるわけにはいかなかった。

「あんこ」が実家に引き取られてからは、時間を作り

せせと会いに帰った。お腹を見せて喜ぶ姿に安堵を覚えつつ、次第に実家になじんでいく様子を見てひどく寂しくもなった。一人暮らしは寂しいだろうと時折送られてくる動画も、うれしい半面、取り戻せない時間を思い知らされたような気になり心を沈ませた。最近では足の関節が悪くなり、大好きだった散歩もあまり長くはできなくなったようである。命の終わりを迎えるのがそれほど先ではないことに気づいた今、かわいがってくれる人に囲まれた実家暮らしが彼女の幸せなのだ、自分に言い聞かせている。

この短編を読んだのは旅先への移動中だった。「あんこ」も小べにのように「神の庭」行きを断るだろうかと考え、こみ上げて来るものがあった。あわてて窓の外へと目をそらした先には重い雨雲が広がっていた。着陸のアナウンスで機内がざわめき、降機の準備があちこちで始まって、私はなかなか本を閉じられずにいた。



本の大切さ

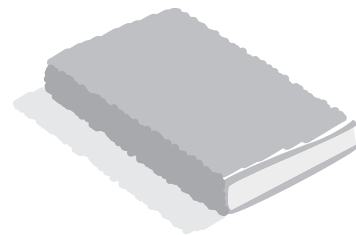
私が本に興味を持ち、図書館に通い始めたのは中学生の頃でした。昼休みの時間になると図書館へ行き、特にホラーやミステリー、推理小説が好きなので、赤川次郎さんや山田悠介さんが書かれる小説を好んで借りていました。これらの他にも、図書館には哲学、歴史、芸術などの様々な種類の本が置いてあり、多くの本を読むことで、自分自身の見えている世界がより広がっていくように感じます。知識が増えていくことも勿論良いことだと考えていますが、やはり、本を読んだ感動したり、笑ったり、「なるほど」と思ったりなど、自身がその本を読んでどう感じたり、どう受け止めたのか、ということが人間として感受性を育てるために大切になってくるのではないかと思います。斯く言う私も、本を読んでいる時には、ただ読み通すのではなく、この登場人物は今どんな気持ちなのだろう、何故このような行動をとったのだろう、とまるで国語のテスト問題のようですが、その人物の気持ちなどを考えながら読むことを心がけています。

私の父もよく本を読むのですが、私に興味を持ちそうな本は色々貸してくれたりします。私は将来、子

幼児教育学科1年 金田 優妃

どもとかかわる仕事に就きたいと考えているので、今は、発達障害に関する本を貸してくれています。まだ全て読んではいませんが、この本を読むのと読まないのでは、これからの私の子ども達に対する接し方が、大きく変わってくるのではないかと考えています。

このように、本との出会いはその人の人生も変えていくような、大きな影響力があるのです。その出会った本の中でも、自分には合わないと思った本があるかもしれませんが、そういう出会いも大切にすることが、これからたくさんの本に巡り合うために重要なことなのかもしれません。実際に私も読んでみた本の中で、「いまいちかも...」と思ったものもありますが、もしかすると、私をもっと大人になったときに読んだら、また違う目線から読むことが出来るかもしれないので、大切に家に保管してあります。この一瞬一瞬の本との出会いを大切に、深く読み込んでいながら、これからも本のある生活を楽しんでいこうと思います。



図書館の思い出

私にとって、図書館の思い出は、中学3年生の頃に受験勉強をしていたことだ。リュックに大量の教科書を持って、開館と同時に始まる私の1日の勉強。1日机に向かって頭を抱えながら問題に取り組んでいた。貸し出しの機械の音しかしない空間に図書館独特の匂いは私にとって落ち着き、背筋がしゃきっと伸びるのだ。勉強が疲れると私は、幼児絵本コーナーへ行く。そこには、小さな子ども連れのお母さんたちがたくさんいて、子どもと一緒に絵本を探していたり、絵本を読み聞かせたりしていた。そして、私も小さい頃こんな風に親から絵本を読んでもらっていたのかなと思い、少し嬉しくなる。一冊の絵本を手に取り開くと、小さい頃、山には本当にやまんばが住んでいると思っていたこと、魔法の杖があったら何に使おうかと考えていたことを思い出した。

夕方になると勉強スペースには、憧れのプレザーを着た女子高生が多くやって来る。大変そうに見えても、私もいつかあの制服を着て勉強したいと思い、勉強に

幼児教育学科2年 大島 梨菜

も力が入った。図書館は同年代の人たちが多くいて、私も周りに負けないように取り組まなきゃとやるべきことが次々に出てくる。そして、図書館から出て階段を下りるとき、今日覚えたことテストまで忘れませんようにと思いながら帰る。

このように、私にとって図書館は小さい頃からの成長を見守ってくれる変わらない場所である。小さい頃から身近にある場所であり、その時の年齢によって思い出が異なる。図書館で過ごす時間は、昔を懐かしんだり、将来を考えたりと自分を見つめる時間になっている。そして、今まで知らなかったことを知ることができるため、自分の可能性を広げられる場所だと思う。

大学生になった今、実習前の焦りと、これもやってみたいという期待を持って図書館で実習に使用する絵本や紙芝居を選んでいる。「この本を読んだら子ども達はどんな反応をするかな」など考えるのはとても楽しい。昔と変わらずに、図書館で身につけた知識で私を憧れへと導いてくれるといいなと思う。

図書館

総合文化学科1年 門倉 早希

図書館に初めて行ったのは、母に連れられて絵本を探しにいった時だ。棚にたくさんならべてある絵本を一冊ずつ取り出して眺めるのが、当時は好きだったように思う。絵本は家にもたくさんあったが、図書館にあるものは特別なもののように感じていた。

もともと「本」は好きだった。だが、絵のない本はそれほど好きではなかった。小学校に入学した頃、ずっと好んで読んでいたのは手塚治虫先生のブラックジャックや鉄腕アトムなどのマンガ本だった。いくら母が年齢に応じた読みやすい本を薦めても、絵が少ないから読みたくないと言い切った。文章のみの本はマンガ本のような動きが感じられず、面白いとはどうしても思えなかった。それがいつの間にか文章のみの本を求めるようになり、今ではジャンルを問わず気になった本を片っ端から読んでいくようになっていた。

思えば、図書室・図書館と言う場所には大変お世話になっている気がする。小学校・中学校・高校と休み時間には必ずと言っていいほど足を運び、特に借りる本がなくても「ただそこに行きたいから」という理由で

訪れ、次に読む本を探したり、さまざまな本をじっくりと眺めていた。また、家の近くに図書館があったこともあり、暇だと思ったときは必要最低限のものと利用者カードを持って図書館に行った。自分でもなぜそこまで行きたがるのだろうと不思議に思うが、あの独特の空間や雰囲気が妙に落ち着くからなのだと思う。だから、図書館と名の付く場所は問答無用で好きだと大声で答えられるし、一日中自由にしていいと言われてたら、高額宝くじが当たったくらいの喜びだ。最近は、附属図書館へレポートの資料や空いた時間に読む本を借りに行くが、あまり長居出来ないことをとても残念に思っている。

最後に私にとっての図書館は、自身を取り巻く環境の隅に必ずある存在であり、ふとした瞬間にその存在を大きく主張してくる不思議な場所だ。私と本をつなげてくれ、また本を通じて誰かをつなげてくれる。人と積極的に話すことが苦手な私には、とても素晴らしい素敵な場所である

財産となった貴重な時間

総合文化学科2年 藤原 弘奈

夏休み中に行われた図書館実習。私は、国立国会図書館で、2週間実習を行いました。東京にあるということから、なかなか行く機会がなく、今回初めて国立国会図書館へ行きましたが、公立図書館とは違うことが沢山あり、毎日業務説明や実習を行うのが、とても楽しく充実していました。違いとしては、納本制度や、複写サービス、館外貸出し禁止などがあります。いろいろある中で、特に、書庫の中へ入ることができ、公共図書館との規模の違いが予想以上で驚き、そして資料で埋め尽くされている書庫に感動しました。歴史のある貴重な本、巻物や地図、デジタル化資料、録音・映像資料、20キロを超える大型本から豆本までさまざまな形態の資料がありました。また、書庫の場所によって、雰囲気や匂いも違いとても印象に残っています。もう一つ印象的だったのが、様々な部署があり、それぞれが専門的な業務を行っているということです。2週間で部署ごとの業務内容や、実習を行ったのですが、同じ図書館内でも仕事の内容に違いがあり、切り替えが大変でしたが、新しい内容だったり、他の

部署とのつながりが分かったり、毎回とても新鮮でした。

その他にも、たくさん新しいことを学ぶことができ、楽しく行えましたが、1つだけ悔しかったことがありました。それは、レファレンス協同データベースの原稿を実際に作成をしてみるという実習で、なかなかうまく文章を組み立てられなかった事です。学校の授業でも何度か、練習問題を解いたことはありましたが、実際にレファレンスに必要な資料を網羅的に探し、だれが見ても分かりやすい文章にするには、たくさんの知識や技術、経験が必要だと思いました。職員の方にアドバイスをして頂いた内容や、頂いた資料を何度も見て勉強していきたいと思います。

今回の実習を通して、自分の知らない世界を知ることができました。最終日に職員の方から、今回の実習は、自分にとって一生の財産になると言って頂きました。一生の財産を消してしまわないように、これからも頑張っていきたいです。

上田女子短期大学教員が学生にすすめる本

Vol.
2



総合文化学科 准教授 佐藤 厚

My Recommended Books



①私の読書の中から

『昨日、^{かもしべつ}悲別で』

倉本聡 (理論社、1985年、ISBN : 9784652071236)

1984年の日本テレビのドラマにもなった。斜陽の炭鉱街の暖かさと大都会東京の冷たさの狭間を舞台に葛藤、模索する若者たちのドラマ。膨れ上がった現代に一石を投じてくれる。

913.6

Mi96

②これは読んでおこう—研究者の立場から—

『夢をかなえるゾウ』

水野敬也 (飛鳥新社、2007年、ISBN : 9784870318052)

意識したことを行動に移しにくい時、何かしらのヒントを与えてくれる。人情味のある関西弁のゾウの神様が教えるを説くエンターテインメント小説である。

③私の著書、論文の中から

『遊びからはじまる学び：

今、幼児の表現活動を問い直す』

花輪充編 (共著) (大学図書出版、2010年、ISBN : 9784903060668)

人の感性を育む「遊び」から健やかな「学び」がはじまる。表現教育・幼児教育・福祉・エンターテインメント業界のクリエイター達と編者が研究・議論した内容をまとめたもの。

376.15

A93



幼児教育学科 専任講師 山本一生

My Recommended Books



①私の読書の中から

『「子供」の誕生：

アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』

フィリップ・アリエス (みすず書房、1980年、ISBN : 4622018322)

本書の中でフランスの歴史学者アリエスは、肖像画といった資料を通して、愛情を基盤とする家族という概念、そして「かけがえのない一人の子ども」に対する愛情がどう歴史的に作られたのか、鮮やかに論じている。子どもへの愛情は人類の本能ではなく、歴史的に作られてきた文化である。昨今、児童虐待などがメディアで頻出することでも分かる通り、親の子に対する愛情は本能ではない。逆に子どもへの愛情は意識的に紡いでいかないと崩壊してしまう概念であることをアリエスは示していると言えるだろう。

372

A71

②これは読んでおこう—研究者の立場から—

『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』

ヘネディクト・アンダーソン

(書籍工房早山、2007年、ISBN : 9784904701089)

アンダーソンはインドネシアという人工的に作られた国家について、文化人類学の立場から研究を行ってきた人物である。彼は、会った事もない他人を「国民」という深い同志愛で結び付ける「国民国家(nation-state)」という概念がどのように作られたのか、鋭く論じる。「国民

国家」は、新聞といった出版物と学校教育を通じて「国民」を作り出し、ある領域に均質に国家権力が浸透するというイメージを共有させる。領土問題など今の国際情勢を考える上でも参考となるはずである。

③私の著書、論文の中から

『ワークで学ぶ教育学』

井藤元編著 (分担執筆)

(ナカニシヤ出版、2015年、ISBN : 9784779509322)

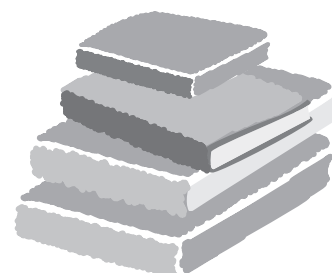
「第7章 学校教員はどのような存在か」と「第12章 筆記用具が、勉強のやり方を変える？」を担当した。前者では教師と教員の違いについて、専門職と公的組織の一員という力点の違いについて紹介した。後者では毛筆、石盤、ノートと鉛筆、タブレット型コンピュータという筆記用具の歴史から、ノートによる作文教育の普及と宿題の増加といった教育方法の変化を解説した。

371

I89

311.3

A46



図書館ガイド

第18回図書館総合展 (11月8～10日 於パシフィコ横浜)

ポスターセッションに参加しました。エントリーNo.23 上田女子短期大学

*参加ポスター82点の中にあつて短大は2校のみの出展でした。簡易ガイドのためのチラシも配布しました。おみやげに配布した「新聞エコバッグ」と「どんぐりのマスコット」は大好評でした。自然に囲まれた本学を色画用紙で作った紅葉、キノコ、くだものなどで表現してディスプレイしました。

パシフィコ横浜



ホール入り口の案内看板



来場者31,355人

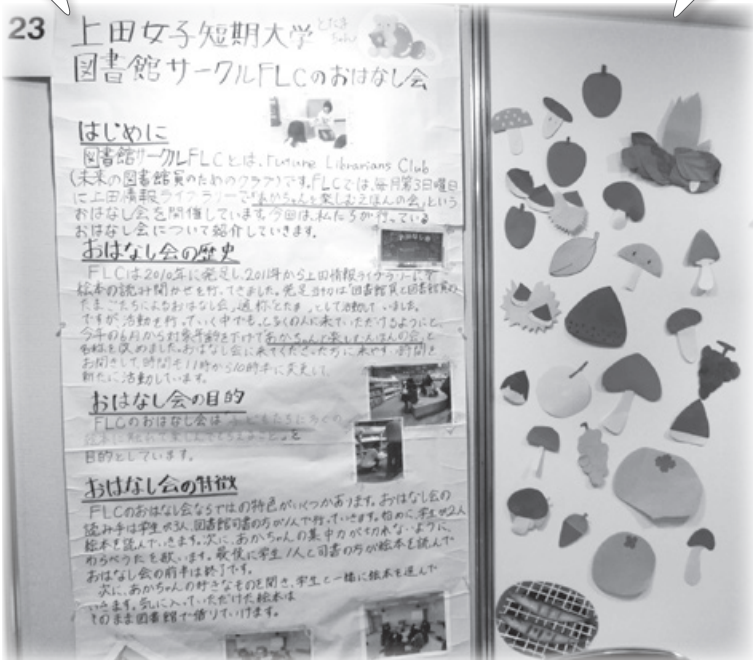


足を止めてポスターを見る見学者



ポスターはFLCが作成

学生サークルFLCと図書館が共に活動している。



職員手づくり、おみやげの新聞エコバッグと裏山で採取したどんぐりで作ったマスコット。



公開講座 「上田女子短期大学図書館講座」

第1回 「子ども読書推進計画」

2016年9月11日(日)

地方自治体では、「子どもの読書推進計画」が作られています。

この計画をより良いものにしながら、子どもたちにいかに読書に親しんでもらうか、一緒に考えていきましょう。グループワークでは、皆さんが抱える課題を出し合い、解決策を考えました。上田市の教育行政関係者、小中学校の図書室の先生、子どもの読書に関わる皆さんにご参加いただきました。



第2回 「読書が楽しくなる葉脈しおりを作ろう」

2016年10月9日(日)

校内で採取した葉っぱを煮出し、葉の葉脈を取り出します。色づけしたり色画用紙にアレンジしてラミネートをかけます。自分だけのオリジナル葉が出来上がりました。幼稚園児、小学生、大人の方にご参加いただきました。



2016年 本学教員の新刊著作

(今年発行の単独著書・共著書・分担執筆書) 著者の五十音順

酒井真由子 先生

『基本保育シリーズ 20 保育実習』 376.1/Ki17/20

中央法規出版 2016年1月発行 ISBN: 9784805852200 (分担執筆)

『実習場面と添削例から学ぶ! 保育・教育実習日誌の書き方』 376.1/J54

中央法規出版 2016年9月発行 ISBN: 9784805853276 (分担執筆)

山本 一生 先生

『ワークで学ぶ道徳教育』 371.6/W35

ナカニシヤ出版 2016年3月発行 ISBN: 9784779510298 (共著)

『教員養成を問いなおす: 制度・実践・思想』 373.7/Ky4

東洋館出版 2016年3月発行 ISBN: 9784491032177 (共著)

『京都大学人文科学研究所所蔵 華北交通写真資料集成』

国書刊行会 2016年11月発行 ISBN: 9784336060884 (共著)

『教育・保育課程論』

一藝社 2016年12月発行 (共著)

『植民地教育史ブックレット1 青島と日本—日本人教育と中国人教育—』

皓星社 2016年12月発行 (単著)

みすず

第43号

上田女子短期大学附属図書館報
2016.12 発行

編集: 上田女子短期大学図書館・紀要委員会
発行: 上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel: 0268-38-6019 Fax: 0268-38-6019
E-mail: lib@uedawjc.ac.jp

編集後記

a postscript by the editor

図書館からの発信 2016

継続は力なり

今号「図書館ガイド」でとりあげている図書館総合展への参加(ポスターセッション)は、連続3回目となりました。本学司書課程の紹介・図書館サークルFLCの活動・おはなし会など、毎回テーマを工夫してのチャレンジです。

また、5頁に登場の藤原弘奈さんは、国立国会図書館での実習公募に、パスしての参加。本学としては、2人目です。

ともに今後も、実績を重ねていきたい活動です。

大橋敦夫